



COP14報告 ポスト愛知(ポスト2020)について

(公財) 日本自然保護協会
道家哲平

(国際自然保護連合日本委員会 事務局長)

196カ国の決定ができること

(意思決定の場としてのCOP)

- 国際世論・国のTo Do (Wish?)リスト・ガイドラインなど
 - 地球環境ファシリテーター (4500億円/4年間) の使い道の決定
 - 生物多様性の研究 (投資) の優先度設定
 - 他の国際枠組みへのカウンター (自由貿易 vs 外来種の国際取引規制)
 - 新規の課題の交通整理 (公海の生物多様性保全、合成生物学、気候工学)
 - 新たな国際ルール (議定書) ・ **国際目標**の作成
- 決定を履行する意思 (or監視) が重要

フォーラムの場としてのCOP

- 政策提言（直接声を本会議の場に／自国や他国の政府代表に）
- キャンペーン（政府を相手とする）
- 情報提供（サイドイベント（会場内集会）や展示、資料配布、エクスカージョン）
- 情報収集
- 専門家・団体との交流
 - メールやウェブより会って話す方が情報量が多い！
 - フォーラムとしての価値大
- 自国の状況を客観視できる目を養う。視野の広がり

IUCN-J/NACS-Jの活動

条約交渉フォロー、サイドイベント情報収集、
CBD事務局/NGOなどとの意見交換/情報の戦略的活用

- 条約交渉のフォローアップ
- UNDB-DAY(サイドイベント) の企画運営・展示
- 条約事務局各担当との意見交換や情報交換、日本の取り組みの紹介
- ポスト愛知についてサイドイベントへの参加と、条約の動きに詳しいNGOの方々中心に意見交換
- ユースの参加支援

発信記事タイトル

- COP14を振り返って☆
- ポスト2020プロセスの合意☆☆☆
- 決定紹介パート2☆☆
- 第2版完成！！：CBD in a Nutshell 2nd edition お披露目イベント(ユースレポート)
- 世界各国のユースイニシアティブの発表：GYBN サイドイベント(ユースレポート)
- 民間保護地域ガイドラインの発表
- 日本の取り組み紹介ブース(ユースレポート)
- ポスト愛知の行方☆☆☆
- CBD-COP14に参画してみても(ユースレポート)
- あなたと自然とのつながりは？：#nature for all サイドイベント(ユースレポート)
- カンクン(COP13)後の農業分野における主流化の取り組み(ユースレポート)

- COP14 決定事項ーパート1 ☆☆
- COP14第1週目が終わりました。
- post2020議題でのユース参画(ユースレポート)
- 漁業管理地域と海のOECM（保護地域的地域）の関係性
- 絶滅危惧種のための日本企業の活動：トヨタ自動車株式会社の例(ユースレポート)
- 2020に向けたラストスパートへ：UNDB-DAYレポート☆☆
- UNDB-DAYでのユース参画(ユースレポート)
- CBD-COP14でのユース参画(ユースレポート)
- CBD-COP14が始まりました。

- 追加で2つ記事準備中
*重要なものには、☆印

基本認識

- 愛知ターゲットは、持続可能な開発目標(SDGs)達成のための基盤
- 2050年「人と自然の共生する社会」がめざすビジョン
- 生物多様性の劣化は、今なお、世界のほぼ全地域で進行中(IPBES)
- 生物多様性保全(愛知ターゲット)達成のための行動は数多く生まれているが、劣化を止めるに至っていない。
- 劣化を止めるには、変革的変化(transformative change)が必要
- COP14の交渉では、検討プロセスを決定

- 特別作業部会の設置と共同議長指名
- プロセスそのものの普及啓発のためのハイレベルパネルの設置
- 多様な関係者（*）を対象にしたり、参画したりする準備プロセスや、地域ワークショップの開催等を通じて検討を進めることを呼びかけ
- 2020年の国連総会で首脳級会合を実施

（下線は、COP10ではなかったプロセス）

【スケジュール案】

○COP14後、締約国等に対する意見照会や地域協議ワークショップ

ワークショップ（各地域2回）等を実施・特別作業部会を最低2回開催などを検討していたが一旦白紙。共同議長の下で再検討

⇒2018年12月：ポスト2020の枠組みや範囲への意見照会

⇒2019年6月：~~2018.12.18発表資料~~ ~~無断引用・転載禁止~~ の公表、意見

多様な関係者って？

- 先住民地域共同体、国連機関、国連プログラム、他の多国間環境協定、準政府・地方自治体、政府間機関、NGO、女性グループ、ユース、ビジネスと金融コミュニティー、学術研究機関、宗教団体 (Faith based organization)、生物多様性に関係したり依存するセクターの代表、多くの市民、他のステークホルダー (パラ6)

検討プロセスで大事にする 諸原則も更新して採択

重要原則:

- 「参加participatory」
- 「包摂inclusive」
- 「包括comprehensive」
- 「変革transformative」
- 「触発(catalytic)」
- 「知識ベースknowledge base」
- 「透明性transparent」
- 「反復性iterative(何度も意見を往復。合意と当事者意識)」
- 「ジェンダー配慮Gender Responsive」
- 「視認性Visible」
- 「柔軟性Flexibility」 下線はCOPで新たに追加された原則



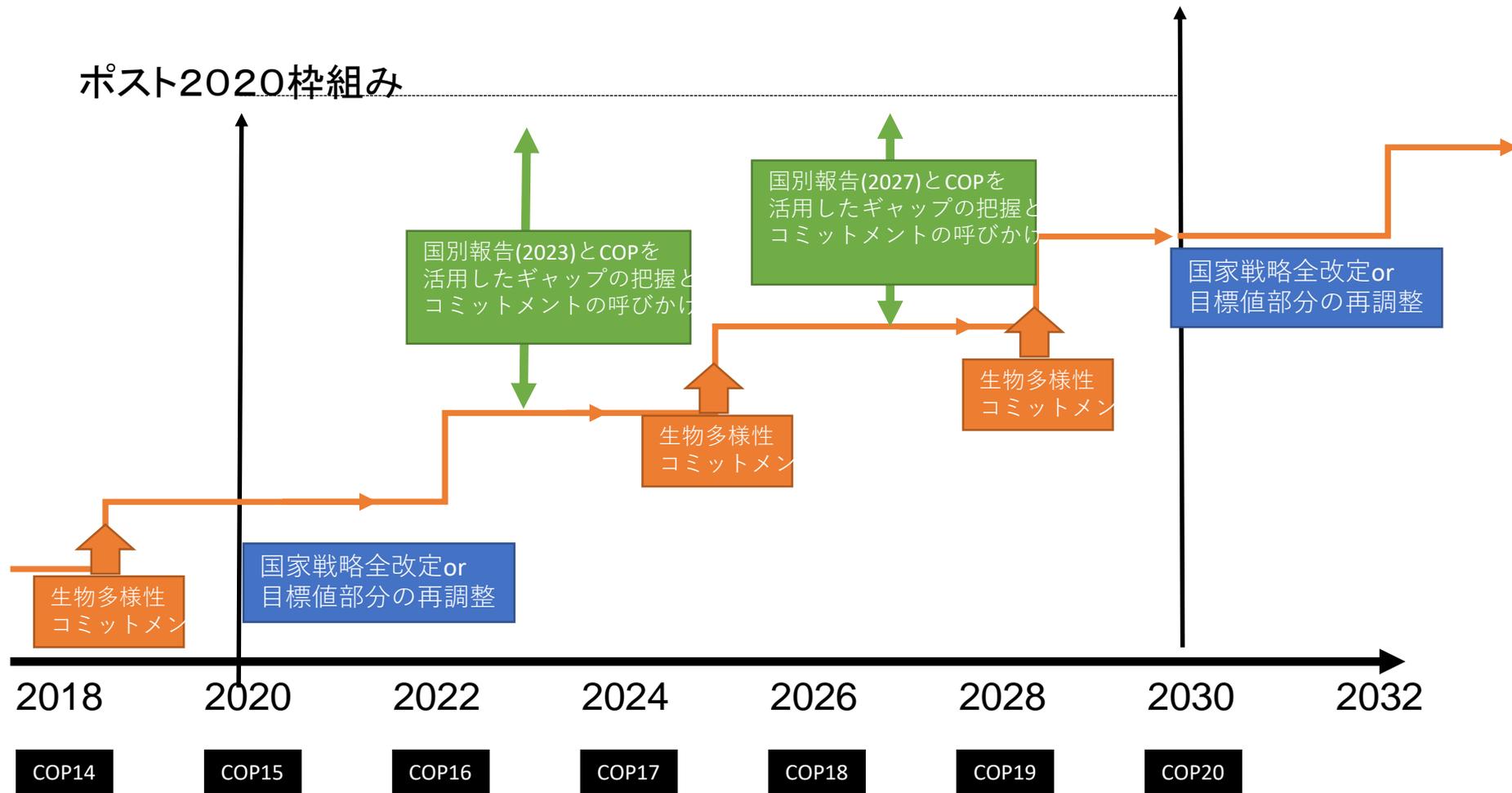
パリ協定のような仕組みの導入検討

- 締約国、その他の国に対して、単独または共同で、自発ベースで、生物多様性条約、愛知ターゲットそして、ポスト2020枠組みに貢献する、生物多様性コミットメント(Biodiversity Commitment)の開発を考慮することを求める決定。
- 先住民地域共同体、あらゆる団体、利害関係者に対して、COP15の前に、ポスト2020枠組みに貢献し、かつ、Sharm El-Sheikh to Beijing Action Agenda for Nature and Peopleへの貢献として、生物多様性コミットメントの開発を考慮するようを求める決定。

国家戦略+コミットメント+国別報告書 (NBSAP+VC+NR)

人と自然の共生
に向けた第3フェーズ
(2030-2040)

ポスト2020枠組み



生物多様性コミットメント メリット

1. 世界目標と国別目標の累積の間に発生するギャップを埋める仕組み、
2. ポスト愛知へのオーナーシップ(当事者意識)、ポジティブな雰囲気づくり、CBDコミュニティ外からの注目、
3. ポスト2020枠組みへの好影響
4. 生物多様性条約と気候変動枠組み条約を橋渡しする仕組み、

生物多様性コミットメント 課題/不明点

- 各国の貢献についてある程度方向性をつけないと、バラバラの提案がなされて累積を計算できないのではないか？
- どのように各国の貢献を呼び起こすか？、野心的な目標を惹起するか？
- 誰がどのように受け入れ（あるいは、内容のチェックをするのか）、約束の履行（実施）状況を誰がどうフォローアップするのか？
- 国家戦略の違いは何か？
- COPの検討の場とどういう関係性をもたせるのか？

ポスト2020のキーワード

- 「SDGs(持続可能な開発目標)との連携」
- 「生態文明(社会規律Social Normレベルの変化)」
- 「Bending Curve(生物多様性の劣化速度を回復へと上昇させる)」
- 「頂点にゴールを掲げ(Apex Goals)、Objectives>Actions>Enabling Conditionsの三層構造」

- 「プロセスのビジビリティ(視認性-多くの人の目に留まる)」「ハイレベルの参画」

- 「企業を含む、あらゆるアクターの参加を促す目標」
- 「コミュニケーションしやすさ」「態度変容につながるコミュニケーション」
- 「具体的で、実施可能な目標」「科学に基づく目標」
- 「ランドスケープレベルの目標」「生態系復元」
- 「ジェンダーの主流化」

- 「統合的なアプローチ(KBAの保護地域化や保全による絶滅危惧種と保護地域を両方達成)」
- 「国(地域)毎に貢献領域を明らかにする(共通だが、差異ある責任)」
- 「種を特定した保全手法ではなく、種の危機要因に着目した絶滅危惧種保全手法」
- 「データの集約、リンクと活用」「社会科学の活用」



IUCNー自然保護カルテのようなものを作って、意味のある貢献を支援しよう

- 保護地域一国ごとに強化すべき領域を提案
(面積/景観/連続性・重要性(KBA))
- 絶滅危惧種一種ごとの保全戦略から、種の危機要因の対策戦略の提案
- 外来種一種ごとの対策から、侵入経路ベースの侵入防止対策へ
- コミットメントを集まる仕組みとしての、世界自然保護会議2020(フランス)開催

国連生物多様性の10年日本委員会

未来へつなぐ
「国連生物多様性の10年」せいかりレー

- 2010年からつないできた10年間(成果)と
- 2030年につなげたい希望と課題(聖火)を、
- 日本全国で考えるイベントの開催呼びかけ
- スタートは、愛知県・名古屋
- 全国を巡り、COP15@中国に持って行き、COP15の成果(聖火)を再び日本に持ち帰る